

## 『虞美人草』 第 16 章 ツイート

Junko Higasa

漱石はさりげなくつぶやくのが上手い。直接的に言ってしまえば炎上しそうなシビアな主張を、世間話風に笑顔を交えながら軽妙に展開していく。それが第十六章の宗近父子の会話である。その内容は社会における「東洋 VS 西洋」であるが、その主軸は当世社会の結婚問題における女性論である。

ここで漱石はまず芝居の大道具である宗近邸の造りを描写して雰囲気を設定する。ふと思うのだが、この『虞美人草』における美術描写は、一見絵画のように見えて「配置と登場」という静と動の立体的構成が脳裏に浮かぶので、芝居の要素の方が強いのではないだろうか。それも静かな日本的音楽を伴った舞台。それを漱石は文章で表していると思う。元々漱石の文章は視覚的要素が強いが、この作品はかなり 3D 的だ。

さて、それはさて置き、この章では二つの主張が絡まる。まず社会・文学から東洋 VS 西洋を見ると、父子の会話の中で漱石は、これから西洋へ赴く宗近君に『ことに英吉利人は気に喰わない。一から十まで英国が模範であるといわんばかりの顔をして、何でも蚊でも我流で押し通そうとするんですからね』と東洋の味方をさせ、東洋派である宗近老人に『だが英国紳士とって近頃大分評判がいいじゃないか』と西洋の味方をさせる。誰がどちらの味方かわからず、英国を見ていない二人が表面的に語る会話によって、身最良の印象を与えない軽い会話に抑える。だが実はここには英国を見ずしてそれに追従する日本人に対する、大英帝国の崩壊を見てきた漱石の批判が込められている。宗近君の更紗のネクタイの結び目は横にねじれている。『どうも、この襟飾は滑っていけない』産業革命の産物がねじれて日本社会を滑って行く。日本は世界進出を阻まれ、ねじれて欧米列強の上を滑って行く。こうなったら『日本がえらくなくて、英国の方で日本の真似でもするようではなくっちゃ駄目だ』『御前が日本をえらくするさ。ハハハハ』もう、ここは宗近父子の会話ではなく、西洋と同等の文学手法を持つ自分が、西洋の上滑りをしていく日本社会を受け入れつつ、東洋の価値を「小説の中で未来へ向けて訴えていくしかないね」という漱石自身のつぶやきである。

そこでその西洋化社会で、新旧感覚が入り交ざった漱石は、軟弱化した新人類男性に向かって「結婚に関する発言権」を得て強くなった女性（妻）の扱ひ方をつぶやく。

『宗近君はずんど切の洋袴ぎりズボンを二本ぬつと立てた。仏見笑ぶつけんしょうと二人静けんすと蛭子和尚と活きた布袋の置物を残して廊下つづきを中二階へ上がる』

まず、生きた布袋とは宗近老人のことであり、明末から清初（1628~1644）という「継」のある祥瑞しよんずいの煙草盆を愛でている。この「祥瑞」という紫がかかった青が特徴の磁器は、日本の茶人のために景德鎮窯で作られたという説や、景德鎮で修行した日本人が有田辺りで焼いたという説があり、宗近老人が『好いだろう。祥瑞は賈の多いもんで容易には買えない』というように、江戸中期には大量生産の偽物が出回ったという。この状況から推すと、宗近老人は「堪忍袋を背負った」「しかしその袋に何でも受け入れた」布袋で、本物を見分けられる目利きのようなのである。彼は庭の植木を『さっき万両と植え替えた。それは薩摩の鉢で古いものだ』という。薩摩女は芯がしっかりして気立てが良い。そこに根付いていた古典的植物の万両を、刺のある薔薇の一種である仏見笑に植え替えた。それは教育によって「外見は美しいが内心に刺がある」危

